法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-09

『源氏物語』横笛の相伝

東條，沙織

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies
(巻 / Volume)
60
(開始ページ / Start Page)
336
(終了ページ / End Page)
330
(発行年 / Year)
2008-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003127

Hosei University Repository

『源氏物語』横笛の相伝

人文科学研究科　日本文学専攻
修士課程一年　東條沙織

はじめに

『源氏物語』には、宴遊の場面、男女の恋愛の場面、貴族のたしなみとして披露される場面、また、人物の人となりが表現される場面など、その多くの巻で音楽が響いている。物語を読むにあたり「管絃にては和琴、琴、箏、琵琶と横笛とて主とせる」[1]と考えられ、それら様々な音色は物語に華を添えている。しかし、音だけがただ装飾として流れているというわけではない。奏でられる音としてのみならず、物語の重要なテーマに関わるのが、横笛をはじめとする楽器であり音楽である。

物語に登場する楽器は笛、笙、篳篥、和琴、箏、琴、琵琶、笏拍子など多くあるが、巻名に使われている楽器は唯一横笛のみであり、これは横笛が重要な役割を担っているためであると考えられる。横笛により何が表現されているのであろうか。

一、横笛の重要性

横笛は合奏において重要視されており、それは横笛譜によってわかる。延喜二一年(九二一)、貞保親王により横笛の勅撰譜である『新撰横笛譜』が撰述された。延喜一九年(九一九)に勅命を受けたものであるが、中世に佚書となり序文のみ現存が確認されている。その存在は『博雅笛譜』『懐中譜』『三五要録』『仁智要録』『文机談』など、後年の多くの楽書や楽譜から知ることができる。貞保親王は平安前期、清和天皇を父に、藤原高子を母として生まれ、楽に優れた人物であり、『新撰横笛譜』以外にも『南宮琵琶譜』を撰述している。勅による楽譜の撰述はこの『新撰横笛譜』から始まったとされ[4]、当時から重要視されていた譜である。また、すでに三つの漢詩の勅撰集があり、延喜五年(九〇五)には紀貫之や紀友則らによって『古今和歌集』が成ったとされ、この横笛譜は詩歌管絃の勅撰の一端を担うものであったと考えられる。数ある管絃打楽器の中で横笛が選ばれていることは、この楽器の重要性を示している。『新撰横笛譜』の序文には「夫絃哥之調、非笛不整(夫れ絃哥の調は、笛にあらざれば整はず)[5]。」と記されており、当時、横笛を基準として音の調べが作られていたことがわかる。横笛譜が勅撰されることとなった理由もこの辺りにあることが窺える。

そして、康保三年(九六六)には村上天皇の勅命を受けた源博雅により、『博雅笛譜』(正称『新撰楽譜』)が撰述されている。この譜は現存する最古の笛譜であるが、しかしそれも五十曲程度しか現存しない。また、その跋文には『新撰横笛譜』ほか、『博雅笛譜』以前に存在した多くの笛譜を参照して撰述されたことが記されており、当時盛んに横笛譜が撰述されていたことが窺える。源博雅は、平安前期、醍醐天皇皇子克明親王を父に、藤原時平女を母として生まれ、彼もまた優れた音楽家であった。その類稀なる才能から音楽にまつわる逸話も多い。

『続教訓抄』や『胡琴教録』に、篳篥や笙は「付物」と捉えられていたとする記述が見られ、平安時代初期に撰述された譜の多くが横笛譜であったことと併せて、横笛を音楽の基本とする考えがあったことが窺える。横笛は音楽的にも重要な楽器であった[6]。

また管楽器には、楽器を演奏する人物への制限がある。「横笛」巻、一条宮を訪れた夕霧に落葉の宮の母、御息所は、

Hosei University Repository

これになむ、まことに古きことも伝はるべく聞きおきはべりしを、かかる蓬生に埋もるるもあはれに見たまふるを、御先駆に競はん声なむ、よそながらもいぶかしうはべる　（四―三五六）[2]

と、夕霧に柏木遺愛の横笛を贈る。女性が横笛を演奏することはないので、このまま一条宮にあると楽器が埋もれてしまう。それならば男性である夕霧に贈り、演奏してもらおうというもので、女性は横笛の正統な伝授者にはなれないのである。また、夕霧も横笛を贈られた後、

この笛のわづらはしくもあるかな、人の心とどめて思へりし物の行くべき方にもあらず、女の御伝へはかひなきをや、　（四―三六一）

と考えている。物語中にも女性が横笛を演奏する例はなく、横笛は男性の象徴となり得る。もともとその横笛は柏木が譲り受けたものであったが、それ以降、誰かに貸与や贈与することなく自らのもとに置いていた。横笛は人々の間で交換されることなく、個人の所有物、同時に個人の象徴ともなるのである[3]。

横笛は音楽史として重要な楽器であり、男性のみが演奏し個人の象徴ともなり得たため、柏木の遺品として成立する。テーマに関わる問題の象徴として不足はないことが言える。

二、横笛によって伝わる血縁

横笛は巻名にもなっており重要な存在であるが、この楽器の行方を追うと落葉の宮、夕霧、光源氏、そして後に薫へとたどりつき、柏木の遺品として扱われていることがわかる。横笛は楽器自体が柏木を象徴していたのである。その遺品である横笛へは、各々思うことがあった。

落葉の宮にとってこの横笛は、どのような意味を持っていたのだろうか。柏木は音楽への造詣が深い人物であり、周囲の人間にもそう評価されていた。

衛門督を、かかることのをりもまじらはせざらむは、いとはえなくさうざうしかるべき中に、人、あやしとかたぶきぬべきことなれば、　（四―二七三）

朱雀院の御賀の試楽が六条院で行われるが、その席に柏木は不可欠であると人々は考えており、その柏木が生前肌身はなさず愛用していた横笛を、北の方である落葉の宮が聞かないはずはない。落葉の宮にとって横笛は、和琴や琵琶と同様故人を偲ぶよすがとなりこそすれ、それ以上の意味はもたなかったであろう。だからこそ横笛が死蔵されてしまうのを悲しみ、自らのもとに通う夕霧に贈り音楽を奏でるのが供養と考えたのである。

夕霧にとっても同じ程度の意味を持つものであり、御息所から横笛を贈られた彼は、

昔をしのぶ独りごとは、さても罪ゆるされはべりけり。これはまばゆくなむ　（四―三五七）

と今ひとしお胸の迫る思いを持つ。しかしその思いは、帰邸後柏木が夢に現われてから一変する。この横笛を伝えたかったのはあなたとは別の人だったという柏木の歌を聞き、横笛の行方について考えをめぐらせ、薫が関わっているのではないかということに思い当たるのである。柏木の心残りを察した夕霧は故人の供養をし、横笛を寺へ寄進することも考えたが、それではあまりにもあっけなさ過ぎると、夢に現われた霊が言っていた横笛の処置とは何か光源氏のもとを訪ねる。そこで薫の父は柏木であることを確信するが、夕霧のその判断は正しかったのである[7]。夕霧のなかで柏木の遺品の横笛は、夢の前後で故人を偲ぶ品から秘密を解く鍵へとその役割が変化する。

一方光源氏にとってこの横笛は、薫と柏木の血のつながりを示す象徴にほかならなかった。柏木が現われたという夕霧の夢の話を聞き、

末の世の伝へは、またいづ方にとかは思ひまがへん、さやうに思ふなりけんかし、　（四―三六八）

Hosei University Repository

と柏木の望みにすぐに思い当たり、横笛を預かる。藤壺と通じるという罪を犯し、自らの子を父桐壺帝に我が子と呼ばせたその報いを、同じ形で受けなければならないという事実を横笛によって突きつけられたのである。しかし一方で、夕霧には薫の出生の秘密は漏れてしまったが、陽成院や故式部卿宮の名前を出し、あくまで柏木と薫の関係をはぐらかし秘密を守ろうとする。

当の柏木本人は、横笛に対しどのような思いを持っていたのだろうか。一条宮で横笛を贈られた夕霧は、以前柏木が言っていたという言葉を思い出す。

これも、げに、世とともに身に添へてもて遊びつつ、「みづからもさらにこれが音の限りはえ吹き通さず。思はん人にいかで伝へてしがな」と、をりをり聞こえごちたまひしを思ひ出でたまふに、（四―三五七）

柏木は自分自身もこの笛の素晴らしい音色を「吹き通」せてはいない、これを大切にしてくれる人がいるならぜひその人に伝えたいと、名器は名手に吹いてもらいたいと望んでいた。薫はまだ生まれておらず、女三の宮とも出会う前の思いではないだろうか。名器を手にした貴族男性ならば、当然抱く楽器への思いと受け取ることができる。しかしその思いはやがて変化する。自分の横笛を吹く夕霧の夢に現われた柏木は、

笛竹に吹きよる風のことならば末の世ながき音に伝へなむ
思う方異にはべりき（四―三六〇）

と言い残して消える。薫は不義の子であるため具体的に名前を告げるわけにはいかないが、あるいは夕霧ならという思いのもとその夢に現われたのであろう。生前は「伝へてしがな」と、伝えたい相手が具体的にはいなかったのに対し、夢に現われたときは「伝へなむ」と、具体的な相手がいることをほのめかしているのである。[8]柏木にとって横笛は、楽の才がある貴族男性の持つ由緒ある楽器であったが、薫が誕生した後は、薫に伝えたい、自らと薫を結ぶ唯一のものに変化したのである。

さて、楽の相伝が記されている『和琴血脈』[9]には「實子以朱引之、弟子以墨引之」とあり、親子関係と師弟関係が意識して書き分けられていたことがわかる。楽の伝授において、親子関係が重要視されていたと言えるであろう。また、楽の伝授に伴い名器の類も同時に伝授されていたことは容易に想像できる。[10]所持していた名器を自らの子に伝えることはごく自然の、当然の行為であった。

落葉の宮のもとにあった横笛は、まず夕霧に柏木の遺品として贈られる。女のもとで埋もれさせるのは忍びなかったのであろう。その横笛は夕霧のもとでもう一つの役割を担う。柏木が夢に現われ歌を詠んだことで、柏木の子孫が存在するという証となったのである。横笛の所在を、そして真相を確かめるために、そのきっかけとなった横笛を持ち夕霧は光源氏のもとを訪ねる。そして光源氏のもとで横笛は楽を奏でるだけの楽器ではなく、血縁を伝える唯一のものとなるのである。光源氏は自らの名誉のため、一方で柏木の名誉のため真実を話そうとしない。あくまで真相を隠そうとする光源氏と、そのような態度から真実を確信する夕霧、一つの楽器という思わぬ存在が柏木と薫の関係を暴いてしまうのである。

横笛は誰のものであるかそれが誰のもとにあるべきなのか、柏木遺愛の品は渡るべくして薫のもとへ渡り、血縁を表わすものとなる。

三、柏木の音を継ぐ薫

「横笛」巻で柏木の横笛が薫のもとに渡ろうとしてから約二〇年、「椎本」巻では、二月になり匂宮が初瀬詣での帰途、八の宮邸の対岸にある夕霧の宇治の別邸に中宿りをした。薫をはじめ若い者たちもこぞって迎えに上がり、そこでにぎやかな管絃の遊びとなる。匂宮たちの管絃の宴の音色は対岸の八の宮のもとにまで届き、昔を思い出させることとなるが、八の宮はその音色を光源氏の横笛の音ではなく、致仕の大臣一族の音と聞いている。

追風に吹き来る響きを聞きたまふに昔のこと思し出でられて、「笛をいとをかしうも吹きとほしたなるかな。誰ならん。昔の六条院の御笛の音聞きしは、いとをかしげに愛敬づきたる音にこそ吹きたまひしか。これは澄みのぼりて、ことごとしき気のそひたるは、致仕の大臣の御族の笛の音にこそ似たなれ」など独りごちおはす。（五―一七一）

Hosei University Repository

夕霧の別邸から聞こえてくる音楽であり、ひとまずは光源氏一族のものかと思う。しかし、六条院で聞いた光源氏とその一族の音は「をかしげに愛敬づきたる」ものであったが、今聞こえてくる笛の音は「澄みのぼりて、ことごとし」いもので致仕の大臣一族の音に似ており、致仕の大臣や柏木のものに似た横笛の音が聞こえてくるというのである。薫の吹く横笛の音が柏木の吹いていた音と同じ響きをもっていることは、薫に柏木の血が流れているということであり、これは薫が血とともに柏木の音を受け継いだ証に他ならない。[11] 八の宮にとって横笛の音は六条院を思い出しその繁栄を懐かしむものであったが、一方でその音色は柏木と薫の関係を表わしていた。

笛の音を聞いてその奏者に思い当たるという例は、「篝火」巻にも登場していた。

東の対の方に、おもしろき笛の音、箏に吹きあはせたり。「中将の、例の、あたり離れぬどち遊ぶにぞあなる。頭中将にこそあなれ。いとわざども吹きなる音かな」　（三―二五八）

西の対にいる光源氏が、東の対にいる柏木の横笛の音を聞き玉鬘に話しかける場面で、たとえ演奏者の姿を見ていなくても、その音色が誰のものであるか聞き分けられるのである。

八の宮は聞こえてきた横笛の音が光源氏一族のものではなく、致仕の大臣一族のものであると思い当たってしまう。ここでは薫が吹いている横笛が柏木遺愛の横笛かどうかは言及されておらず、薫が横笛を受け継いだことは「宿木」巻で、薫が女二の宮を迎える前の晩、藤壺の藤花の宴において薫が演奏する場面に「笛は、かの夢に伝へし、いにしへの形見のを」と初めて描かれる。しかし「椎本」巻のこの時点で薫の横笛、少なくとも音色は柏木と同じものであった。[12] 薫が誕生した時すでに横笛の音は血縁とともに受け継がれ、その存在を証明していたのである。八の宮は柏木とも女三の宮とも直接関わり合いがなく、薫の出生の秘密はその存在すらも知り得る術がない。しかし、そのような不義密通の当事者ではない第三者に秘密が漏れてしまったのである。八の宮が薫の笛の音を致仕の大臣の音色に似ていると聞くのは、薫が柏木の横笛の音を受け継いだことを表わし、また、薫の秘密が周囲に漏れていたことを読者に向けて暗示しているのである。

薫が誕生したのは光源氏の子としてであり、柏木はその腕に我が子を抱いていない。女三の宮が出家したと知り危篤に陥った彼は、薫の姿を見ることはできなかった。しかしそれにもかかわらず、薫は柏木の音を受け継いでいる。直接横笛の伝授を受けていない、まして会ってすらいない人物の音をなぜ受け継ぐことができたのか。それは薫が柏木の血を受け継いでおり、その血縁が音楽をも伝えたからである。つまり、柏木と同じ音色で演奏する薫は柏木の子孫としての血縁を継いでいるということである。血縁を表わし人の心の中まで表現してしまう音楽は、決して表面化してはならない秘密をその美しい澄んだ音色にのせて、外部に運んでしまったのである。

柏木は夕霧の夢で、せめて子孫にこの横笛を伝えたいと強く願っていた。形見の品を贈ることで、自らと薫との関係を証明したかったのであろう。そして自らと同じ音色でその楽器を奏でてほしいと願っていたのである。当時音楽の継承は血縁によってもなされると考えられていた。[13] とすれば、柏木の子である薫は当然柏木と同じ音色で横笛の音を奏でるはずである。致仕の大臣の横笛の音を柏木が継ぎ、柏木の横笛の音を薫が継ぐ。口外することはできない親子の関係が、横笛によって証明される可能性が秘められているのであり、何よりも確かな絆となり得るのである。柏木のその切実な願いは叶えられ、八の宮という第三者の耳に入る結果となった。血縁により相伝された横笛の系譜は、その音が外に流れ出し、薫の出生の秘密を漏らしてしまったのである。

紫式部は、ある事柄が音楽によって周囲の人間に気付かれてしまうという音楽観を持っていた。『紫式部日記』に、

風の涼しき夕暮、聞きよからぬひとり琴をかき鳴らしては、「なげきくははる」と聞きしる人やあらむと、ゆゆしくなどおぼえはべるこそ、をこにもあはれにもはべりけれ。さるは、あやしう黒みすすけたる曹子に、箏の琴、和琴、しらべながら、心に入れて、「雨降る日、琴柱倒せ」などもいひはべらぬまに、塵つもりて、よせ立てたりし厨子と柱とのはさまに首さし入れつつ、琵琶も左右に立ててはべり。

（『紫式部日記』[14]）

Hosei University Repository

と書き、自分の弾いた琴の音によって心の中が見透かされてしまうのではと嘆き、音楽が人間の感情を表わしてしまうと考えている。[15] 文字で表現できなかったことを、音楽で表現しようとしたのである。紫式部は、八の宮が聞いた横笛の音には薫と柏木の関係が秘められ、その音の中に真実を込めることができると考えたのである。

また日記には、箏の琴や和琴、琵琶を部屋に置き日々の憂鬱を慰めるためにこれらを掻き鳴らしている様子も書かれているが、紫式部は箏の琴が得意であったことが『紫式部集』の「『箏の琴しばし』といひたりける人、『参りて、御手より得む』とある返事に」という詞書からも知られており、宮中に仕える貴族女性は教養として箏の琴が演奏できなければならないが、紫式部のそれは抜きん出ており同僚の女房が直々に箏の伝授を請いに来るほどであった。高い音楽教養、識見、才能を持ち音楽の造詣が深い作者だからこそ、音色のみが音楽ではないという音楽の持つ可能性に気付き、物語の中に取り入れ重要なテーマを託すことができたのである。

四、秘密を流す横笛

ここでもう一人、冷泉帝の存在が思い出される。彼は光源氏と藤壺の間に誕生した子であり、薫と同様その出生に秘密を抱えている。冷泉帝は東宮時代は不遇の身でありながらも、光源氏が明石より召還された翌年、光源氏と藤壺を後ろ立てとして無事即位する。その時代は、

さるべき節会どもにも、この御時よりと、末の人の言ひ伝ふべき例を添へむと思し、私ざまのかかるはかなき御遊びもめづらしき筋にせさせたまひて、いみじき盛りの御世　（二―三九二）

であった。光源氏にとっても栄華を極めることができた時代である。世話をしていた故六条御息所の娘を入内させ、彼女はそれまで時めいていた弘徽殿女御を抑え優位に立っていく。やがて中宮となり、光源氏の権力は磐石のものとなった。冷泉帝と光源氏、親子で聖代を築いたのである。やがて藤壺が崩御しその四十九日が過ぎた頃、冷泉帝は夜居の僧都の奏上により、光源氏が本当の父親だという自らの出生の秘密を知る。

「……またこのことを知りて漏らし伝ふるたぐひやあらむ」とのたまはす。「さらに。なにがしと王命婦とより外の人、このことのけしき見たるはべらず。……」　（二―四五二）

他に秘密を知る人物がいないかを探る冷泉帝であったが、僧都はそれを否定し秘密は守られる。光源氏と冷泉帝の親子関係は第三者には漏れず、世の中の人たちにとって冷泉帝は故桐壺院の第十皇子以外の何者でもない。光源氏と藤壺の不義密通とその結果誕生した子の存在を知るのは当事者たちだけであり、彼らだけが抱える問題である。この秘密は冷泉帝の御世に不穏な影を落とすことなく、逆に親子の関係を深め、治世の基盤となったように見受けられる。冷泉帝の出生の秘密は守られ、そしてそれは安定した華やかな時代と、隠された親子の絆をもたらしたのである。

一方、薫は柏木と女三の宮の間に生まれた子である。光源氏に密通を知られ心労のあまりこの世を去った柏木は、自らの子へ自分の遺愛の笛を贈ろうとする。その橋渡しとなるのが夕霧であるが、死の直前柏木は夕霧に光源氏への取りなしを頼んでいる。

いかなる譏言などのありけるにかと、これなむこの世の愁へにて残りはべるべければ、論なう、かの後の世の妨げにもやと思ひたまふるを、事のついではべらば、御耳とどめて、よろしう明らめ申させたまへ。亡からむ後にも、この勘事ゆるされたらむなむ、御徳にはべるべき　（四―三一六）

もちろん夕霧は柏木の密通を知らず、なぜそのようなことを託されるのか不思議に思うが、この疑問が夕霧の中に解決されずに残り続け、やがて「横笛」巻でその真相にたどりつくのである。

柏木は薫を抱くことなく亡くなり、一周忌に夕霧の夢に現われる。遺愛の笛を自らの子ども以外の人物が持っていることに対して、異議を唱えにやってきたの

Hosei University Repository

だ。柏木の詠ずる歌を聞き、夕霧は抱えてきた一つの疑問に答えを見出す。あの時感じた違和感がここで解消されるのである。それは柏木と薫の親子関係に他ならず、子孫に伝えたいと願った横笛は、奇しくも夕霧という第三者に秘密を漏らしてしまう。そして八の宮が聞いた横笛の音は柏木と薫の関係を響かせていた。

外見が似ているなどのような視覚的判断ではなく、奏でる音という聴覚的判断により秘密が流れ出るのである。二人の不義の子の決定的な違いは、横笛によってもたらされることとなった。

おわりに

音楽は耳で聞き享受するものである。しかし『源氏物語』の音楽は目で読み享受した時にも音が流れ、それだけでなく物語の重要なテーマに関わっている。物語において間接的ではあるが何かを象徴し、表現し、指し示しており、音楽が物語解釈の重要な一役を担っている。当時日常的に音楽が奏でられていた中で、音としてだけでなく楽器や音色に意味を持たせることによって、音楽という意味の幅を広げたのである。その中でも横笛はその楽器自体に柏木の血縁が託され、その音色には音楽の相伝による血縁の証が秘められていた。芸術が装飾として華やかさを添えているだけでなく、欠かすことのできない鍵となっている。これは多くの才能をもち、音を楽しむという当然の特徴のみを音楽に求めなかった作者だからこそ、成し得たことである。また、横笛は管楽器としての特徴から個人のものとして認識され、男性のみが演奏し、文化や教養として扱いやすい楽器であった。加えて、勅撰譜が撰述されその他にも多くの笛譜が書かれるなど、音楽史の視点から見ても重要な楽器であった。そうした横笛を作者は巧みに使ったと考えられる。

柏木遺愛の品である横笛が落葉の宮、夕霧、光源氏を介し薫へと伝えられ、横笛という楽器そのものが柏木の血縁を告げる役割を担っている。そして柏木の横笛の音を薫が受け継ぎ、血縁によって伝えられるとされる音色は、出生の秘密を抱える者の血の相伝をも明らかにしてしまった。横笛がその存在と音色によって血縁を伝えることとなった。つまり、柏木と薫の関係が隠し通せなかったことを横笛によって表現しているのである。

薫は血縁の証の意味を持つ横笛を贈られ、しかしその横笛によって秘密が漏れてしまった。不義密通の末にできた罪の子の問題は、光源氏も抱えるものであり物語から外すことのできない重要なテーマであると言える。そして横笛という一つの楽器がそのテーマに寄り添うようにして物語を貫いているのである。『源氏物語』の横笛には貴族男性の教養、華やかさやもの悲しさを添える装飾的役割だけでなく、薫の出生の秘密を表わすなど、多くの意味が込められていた。横笛は物語の重要なテーマを託され、その根幹の一部をなしているのである。

注

(1) 山田孝雄『源氏物語之音楽』(宝文館、一九三四年七月)

(2)『源氏物語』本文の引用は小学館新編日本古典文学全集による(巻数―頁)。

(3) また、利沢麻美氏は「音楽―源氏物語における横笛の役割」(『源氏物語研究集成』十一、二〇〇二年三月)のなかで「横笛も若い貴公子たちが携帯して演奏し、次第に必携となり、それによって貴公子たちの象徴的な楽器となったのではないか。」とされている。

(4) 遠藤徹「平安朝に撰述された唐楽譜序説」(『日本社会の史的構造　古代・中世』一九九七年五月)

(5) 読み下しは、福島和夫「新撰横笛譜序文並びに貞保親王　私考」(『東洋音楽研究』第三十九・四十合併号、一九七六年十月)による。

(6) (4)に同じ。

(7) 小嶋菜温子氏は「柏木の笛―光源氏主題の継承をめぐって―」(『むらさき』第二三輯、一九八六年七月)のなかで「六条院で故人に生きうつしの遺児・薫を目のあたりにして、『末の世』を託すべき『思はん人』が、特定の像をもつ『思ふ方』であったことにしだいに気づかされるのであった。」とされている。

(8) (3)に同じ。また、廣田收氏は「『源氏物語』における音楽と系譜」(『源氏物語の探究』第十三輯、一九八八年七月)のなかで、横笛を「子に伝えたいという柏木の意志は明白である」とされている。

(9)『続群書類従』第拾九輯管絃部(一九三一年六月)

(10) 三苫浩輔「源氏物語の音楽相伝」(『沖縄国際大学文学部紀要(国文学篇)』一六―一、

Hosei University Repository

一九八七年十月）

（11）（10）に同じ。

（12）（10）に同じ。

（13）高橋亨「横笛の時空―源氏物語の音楽とその主題的表現―」（『源氏研究』四、一九九九年四月）

（14）『紫式部日記』本文の引用は小学館新編日本古典文学全集による。

（15）中川正美氏は『源氏物語と音楽』（和泉書院、一九九一年十二月）のなかで「心中思惟では描けず、会話でも地の文でも綴りにくいそれを、音楽を用いて綴ろうとした」とされている。

（本稿は、二〇〇六年度卒業論文「横笛に表わす源氏物語」を縮小、修正したものである。）